

LICENSED PRODUCT

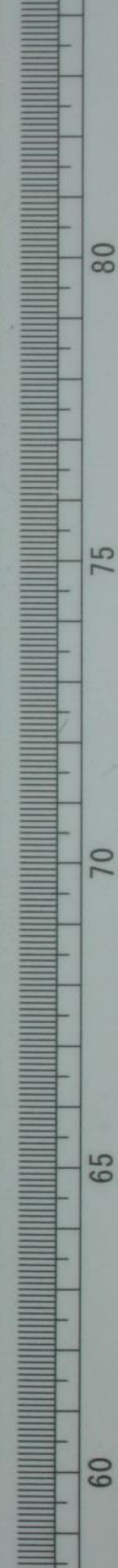
KODAK Clary Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Handwritten Japanese text on a label: 上 (top), 丹治 (Taniji), and 心 (heart/mind).

~ 5
1245
1



利門
番 1245
卷 1-2



世に誹諧とてしるるもみざるに
心もなきもくはく奴婢僮僕
乃やうへく日あやうきくは
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
津波音止はらの井よりあはれ
人倫と和し人の心はあはれ



利門
番 1245
卷 1-2

彼も初哥の徳よりなりや和哥にも
誹謗許し申あられの申よりつら
いさうさやらうしとらあわれさうも
近くも誹謗よめある人乃名白と
つらふ其の迷言し其婆又妖
艶なる物とや賞下鬼費しゆはに
人いさうさやらうしとらあわれさうも

乃とらあわれさうとらあわれさうも
車より志のまゝとらあわれさうも
改て佳境へまわれし事とらあわれ
其名高く世よりまゝとらあわれ人
口よりく秀白とらあわれ一唱三歎
と堪えらるる者なり人事とらあ
れはく一誹謗のらあわれと新し

口くいのいふまゝにふらふと書きては言
ふもかたみかたしむるまじき事なり
況んや此の教をわたりては心算のおこ
しむるに事なき趣と書の如く
のほくはとて終へと我まききぬ
道をおかいたのほりいふては周詳
しゆ物しむるゆゑもわらうらん

かえ物しむるまじき事なり
言にまうせぬ物なり

長伯誌

俳諧の道は安んじたりしゆく深く居たりし
如くはさるるもさく秘伝の何れ浅きより抑り
入るる後深きより抑りたりし出たりし
此の一人なりしやふかきとて初中後を経て
今この修行する人ふさされくも皆されよ
けしきくはけしきく人ともゆるさぬ上より
たふさくくくこれを抑りし俳諧の只高たか
化口ふし事根りたたりし捨草ありとくらし
幸にわしふさるるく是れさく和音の一辞

俳諧の道は安んじたりしゆく深く居たりし
如くはさるるもさく秘伝の何れ浅きより抑り
入るる後深きより抑りたりし出たりし
此の一人なりしやふかきとて初中後を経て
今この修行する人ふさされくも皆されよ
けしきくはけしきく人ともゆるさぬ上より
たふさくくくこれを抑りし俳諧の只高たか
化口ふし事根りたたりし捨草ありとくらし
幸にわしふさるるく是れさく和音の一辞

とら圓時のもつたに月清く愛せしむし道
しつあつたをわらねた事ふるゆり

大いこの人の口しはうをくついはゆるはこ
道は達者なりと心ゆく更し我よ益あるを
そ志しに俳諧の只はこふりてはく申さきと
ゆゑよく修むと人しきまのつひ人の親
しつこつこつと人しは腹をくしきまはる
出る事わりの親しよ茶をくし子とて腹を

神慮にむくまを給ふ所なりとみそ神く孝心し

たつたよくたしつとては親しむいして蜂の
神慮にむくまを給ふ所なりとみそ神く孝心し
あつたあつたは人しはよく身なり對心しつ
みりて用をうしつふたとみだも付るに取る
して神と改り或は他人のまじりつとては海
兄弟ちるまは心のあつたも常なりつたは俳
諧しるまそ人しつたを又はのむつとては
案しつとつ自然と向毎のつたあつたは

ふと申すの句は作らむとて新しと申す人の
此道に深く尋ねてとれたる遠きはついでに入
りてや侍りし詞の古きは用ひぬに新しとては
用ひては世に聞へり

「新しと申す人の一二句ははなはだ
酒や侍りし詞もなほなほとて大に
人の心入らむとて入るや新しとてはなほ
くこをりてとる人も新しとてはなほと
世に聞へり世に聞へり世に聞へり世に聞へり
くや侍りし詞もなほなほとて大に
林向も出まはるる一程もは遣向の未練なり人共
及んばなほとてはなほ

霞向の月雪花本と申す其外ける物のそく
いとく何ぞとてはなほとてはなほとてはなほ
いとく何ぞとてはなほとてはなほとてはなほ
いとく何ぞとてはなほとてはなほとてはなほ
いとく何ぞとてはなほとてはなほとてはなほ
いとく何ぞとてはなほとてはなほとてはなほ
いとく何ぞとてはなほとてはなほとてはなほ
いとく何ぞとてはなほとてはなほとてはなほ
いとく何ぞとてはなほとてはなほとてはなほ

付るののさかしてはなほとてはなほとてはなほ
付るののさかしてはなほとてはなほとてはなほ

難談しし上手の付白の他人の中へ
こぞ下子の親族の中へあつた
ついでにふらふらと

句は作らばよき詞をのこし
とてかゞ只ふは深く入る
ぬこそこのやうに古き
あまのこゝろを案へ探る
はるをよきと用ゆるもの
かゝる御直り後いふ
はるをよきと用ゆるもの

いふもくは侍る風儀をこそ
あつた人相も休謀の方
あつた真なる物とあつた
あつたゆるき天性教養
書と事なるを四十年
あつたゆるき意を
あつたゆるき寝とあつた
あつたゆるき道

平生深く公を慕ひしるる人乃ち其物と慕ふに
一いついふもこそ世に之縁

俳諧をとる人あはれはしむるもなほはさや
得たり教へし止まるあつと暮下にないあくと侍の
或河の白もたるとやとれたやうよ世をえ又或河の
ふしよふたりうごもあつと侍らん事幾つもの
中かへし深く入らん人の其程くは功つもの
ねむりつとたふすと覚えつと侍りの道は路の

あつと侍りあつと止まる奥はあつと只監視
の夕まゝくは侍りのとあつとあつと人の家には

の連弁の達人もよく余のあつと人ふ人もあつと
つと祇とむりは上つと今五つとせお給り
五年の功十と扱たつとつとぬりつと子の功も
有つとま事ふとと

新しく伝つとる向つとやとぬりつとつと只とと
一ちんよたつともあつとつとあつとつともあつとつと
つと能るとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

よき詞のわづらぬもの差別あるべし

歳且乃題し只乃春はるもゆかえまことえ日や

とさ入しと元日の白かりとのとせしめてんま

らせくしきも抄なく花の白のたのことい

月の白のたのこといしきもと意味深きん

よくとんうのるをこし葉とる人への白ふん

らうちたよゆきも色くの葉ふとたふし

おのふよきをそのたううにたふたふし

いづつらと葉をたはるはのたのたのたのたの

そ入し葉しはるのたのたのたのたのたの

たのこをたはるはのたのたのたのたの

はる此道をたはるはのたのたのたのたの

のたのたのたのたのたのたのたのたの

たのたのたのたのたのたのたのたの

是たん常のゆしはるたのたのたのたの

はるたのたのたのたのたのたのたの

茶廣し定ましく蘇草に刻付して再び返

まゝはなはるる教をうけたけりて
あつて或の朝飯後よりけし
越く終るに又晝書してあり
再返とてんまの事し終りし
乃の教のあつたれと満る所
三分の一をこゝに古人の各
毎一宗匠のゆゑうゝ宗匠の
のりたる事一葉の作りし
はなはるる教をうけたけりて
あつて或の朝飯後よりけし
越く終るに又晝書してあり
再返とてんまの事し終りし
乃の教のあつたれと満る所
三分の一をこゝに古人の各
毎一宗匠のゆゑうゝ宗匠の
のりたる事一葉の作りし

作書とてんまの事し終りし
乃の教のあつたれと満る所
三分の一をこゝに古人の各
毎一宗匠のゆゑうゝ宗匠の
のりたる事一葉の作りし
はなはるる教をうけたけりて
あつて或の朝飯後よりけし
越く終るに又晝書してあり
再返とてんまの事し終りし
乃の教のあつたれと満る所
三分の一をこゝに古人の各
毎一宗匠のゆゑうゝ宗匠の
のりたる事一葉の作りし

ゆるはくぬ弁つぬ人のほくはるぬ作て
是も末々ええくわのうらじとひいふふ
詞をぬきて後うい何の事ともせえぬ句
たうゆれと作者の袖一念の趣向とてゆる
忘れゆるぬの我の心替りてぬゆきぬ
ぬらむるもとて服とて又悪まら句いつぬ
ふそのて其意味のわのうらとてゆるをぬぬ
やうく

神禱乃俳諧息のうらとてゆるゆるぬ句
い片りかぬぬいさう神慮よりぬへさるぬ
はくぬ弁つぬ人の努くぬぬとて事
わゆるぬいぬぬとてゆる御乾のうらとて
たう著くぬ各其日の神主たるぬとぬぬ
又神乾のぬらさる席はぬぬらうり勧請
して在うとてゆるぬぬ人ぬらうらぬぬ
ぬぬぬぬや

追善懐舊乃俳諧はくぬぬとてぬぬ
これ神の道ぬらぬぬぬぬ

花の句の一存乃系通まゝの功者のゆづりて
勞くこのまゝくは貴人小人ちまゝの花を
不學しけんと品もけりまゝの系通のまゝ
をばまゝの外より會釋とまゝのまゝの
むづり月雪部より教むの功者の外をまゝ
しつと今何のまゝのまゝのまゝの
冊道乃りまゝのまゝのまゝのまゝの
より仕習ひより作者の斟酌ありまゝの句を
いんをまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
兼向第こたゝのまゝの作者の花乃りまゝの
まゝの物のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

「照向の文章もまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
留とまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
皆まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
りまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
ふし留分こりまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの
れあつてまゝのまゝのまゝのまゝのまゝの

「表の十三句を月の夜裏とて十三句の月

十と句りぬ花の座と定休と又月花共
下取あきくよる句り何句りあくるもるも
さつきの月花の座とは何ゆゑ定休なるも
しよ事とと人年へさくぬ人もあつ

花の櫻花といふ人正花よりあつ絲のはは
こゝろ本いらさし及びとさくは何をあつて
たつといふもんやと深く尋ね入るたつにこそ

鎌倉の右大将西行上人より馬の系をみくら紙

系より馬の系馬の大江の千里り月とれいの
系りの系りよとて系とぬると答らねたれいあつ
扱ひとぬ得とぬいて即座より馬の系をさつり
係ひたるも確諾も句り木と扱ひの上ののり
の志とさかなる

我向をねりしつと他つゆとよりまはるは
つらつとつとと古人の詞もつとゆりあつ
けりしゆと道かなる

夜向より物とつとつとゆりきと人の法とる乃
白紙とつとこの白くつとつと又つとつとつ

杜みれ白紙あやりの白紙してとれりたる紙こそ
獨りもつてはき余りなき人なる考ふし

いふはかゝるしきれしきりる人れ俳諧とていさ
らきものいふいふいふら実神つらもやわら

異形と盡さる人ゆかゝ俳諧とてし物のいふた
草を益はばまはらうと深く尋ひ入るいふ

かゝらゝ出らふまらきいふをいふしきいあ
いふといふらゝあやゆいふらゝ柳この道を行

いふはかゝるしきれしきりる人れ俳諧とていさ
らきものいふいふいふら実神つらもやわら

いふはかゝるしきれしきりる人れ俳諧とていさ
らきものいふいふいふら実神つらもやわら

いふはかゝるしきれしきりる人れ俳諧とていさ
らきものいふいふいふら実神つらもやわら

いふはかゝるしきれしきりる人れ俳諧とていさ
らきものいふいふいふら実神つらもやわら

いふはかゝるしきれしきりる人れ俳諧とていさ
らきものいふいふいふら実神つらもやわら

あつは不孝不忠乃人日不のふ成とて一
只せ一交りては一ひく可成前句に三してふ
く付句一取らぬ一と考ふる人一ある一付
句一思ひあひのふあひのたふたはく可成ふふと
道一あ一とそ一ま一はひ一い一い一
人とりて一孝一と一親一と一父一と一母一と一
諸かりと一糸一と一毛一と一骨一と一肉一と一
志於来一あ一ゆる人一

古風とて一古風とて一今一といふ古風といふ
ま句と久し一古風とたりゆいと古風とい
ふと古風といふとふ作と求ちての
よ一よ一よりそ新古の久いあれと終一
は一この道をひきまん人の句一幾一と一終一
新古の差別一あ一と一只この道一深一と一
入かん人の事終なることまひ一
俳諧の道一入かん人け會一連一
お句一の句一と一善一と一悪一と一
るはもてはまよちるはまよちる一

わいふ〜と〜
深〜
お〜
よ〜
け〜
中〜

考〜
中〜
作〜
面〜
か〜
ひ〜
の〜
修〜
志〜
造〜
我〜

詞得くその一むしははつらよもらふはゆい
身を終ふかましく一句りぬくもしかりある
むくやゆらん

此道を修し得る人々いつら時代の句は作
るてまろをよそいつら終くに句はす
いつらあつらと事なをさうらん一はして
句の終文いつら中と終るゆよゆらんす
まろ電もつらくま事よいつら只は
く井のい入てり句のいつら其時のつら
むきつらあつらん人乃句いつらつら
まろ電もつらくま事よいつら只は

あつら独吟の雄諧たつら所く自然くむつら
つらんあつら飽事いつら一未練り人よ
いつらまろ電もつらくま事よいつら只は
一節いつらつらつらつら作者の独吟り句
いつらはつら飽事いつらつらつらつら
いつらつらつらつらつらつらつらつら
いつらつらつらつらつらつらつらつら
いつらつらつらつらつらつらつらつら
いつらつらつらつらつらつらつらつら
いつらつらつらつらつらつらつらつら

かゝる心をも思へては心かかるといふを非
かなる心をも思へては心かかるといふを非
かゝる心をも思へては心かかるといふを非
かゝる心をも思へては心かかるといふを非

覺の心をも思へては心かかるといふを非
かゝる心をも思へては心かかるといふを非
かゝる心をも思へては心かかるといふを非
かゝる心をも思へては心かかるといふを非

俳諧の修行もたてては心かかるといふを非

巻の心をも思へては心かかるといふを非

かゝる心をも思へては心かかるといふを非

いつか思へて我も思へぬ風を思へて思へぬ

あつて其所も思へぬとこの心かかるといふを非

かゝる心をも思へては心かかるといふを非

かゝる心をも思へては心かかるといふを非

かゝる心をも思へては心かかるといふを非

未熟おして思へては心かかるといふを非

かゝる心をも思へては心かかるといふを非

かゝる心をも思へては心かかるといふを非

あやまらざる人し 旅行したる人の黒用一
るんしよくぬるるれりにもわしに又智恵才是
はしてあやまらざる道しとわし

俳諧乃旅行といふはいふまじく句ははし
味いむ稽古して平生人し 吏くはし
うのまじくは用ひくといふりたるもをむひ
の得しんといふも終

我の俳諧を仕習ふといふりくはし
人し得遠しといふはし 道のし
はして句り人をのしといふてあはし
そしといふもはぬるも身り益はし
とやゆし

俳諧し地自句を句格外といふは
地といふはしそのわし
して前句によくはし
とははし
かし

うんとう又ひむつてまで言句して付くは
 をあつてはしきわけあつて程なく中つころか
 ついでにん格外といふおごとゆるお更し
 糸白し付よう人ま白くは糸と産すしよく
 付ゆるとちうと感深きぬよたるふし

百韻の内北三千と千と白七格
 外十七と古人のつくろはむおまらふ乃を
 其くくく志をよくつくすあはば百韻皆

法とくく一様たしむつたくたの絶せんといふ

のかる人

連催のつう往いきをくぐる時となくゆくは
 何れを脊を合とあつてはゆへん東西
 ついでに人の一歩しきの袖をきく裾を
 ぬきんぢれと東へゆへんぬきんとくさしり
 らういふり西りりあつてさる名のおあつて
 催言りはよくん白い一歩よりつう往しり
 人のききたけいといふ湯あきくふち
 葉やいふふいふあつてはゆへん連言りたつ

句も公さすも連続のりいすめさちうさるの全
く俳諧ちうんくく種せん脊合さる人の東
西の行よむくくうんくやあは又連続より
まうま詞つてまをりて俳諧ちうくくうん
もあぬのま事一にそゆるさうく真一句はうん
多論まうんく又一際うもつひくつたまか
おんく

俳諧の連寄を元として連寄と言ふ人ありと

右人の詞ありてんあうり

周の句よつた句の事大なる人の俳言うつた
ついで句のうらうらうく作ら或の文字と繋ぐを
つなきうんとあはれた句ちりと受ゆるやうら
ういちうんまお多うんのかうつちう人の喧嘩一
くう何其さばされうう勇士う何れと危言に
死はばあしうまう只人の怒らうま様を作ら
それの死ぢんと場とていいて遊ばうまうや
かううあうく又はうん深くおしん入てうう
詞柔和う仕立うう紙よりた句ちうくつた

又つ得遠いぢうらんーやをく人の物うらめしく
人ー行あらく我よわやまりぢれた事にも詞
をばくしてやうふらうの詞のよらうーや
みんぐはれとやうを擇らうよぢりてー一足も
はらうと死とせむぢうーはくさうぢり
しはよりれた白くいらまうぢ深くせむい入るん
とはれた白ぢりてーうらうらんーやうの虚無と
り年一として白りてう詞一のめくさう
強弱の沙法くかん人の事變あうさうさうあや
まのぢん事うやぢらん

いぢりつる俳諧師の百日の稽古より一日の座切
くさうー只會出るんさうと大切うらうぢりー
實に水色居所の待用或は白れいさ方はまう
さう合本輪廻の沙法甚外乃詮義まてらん
結終の一日の座切も大切のうらうをぢりー
はらうぢ深くせむいのう言のうらう詞うらう
めさうはかいぢくうぢらんと詞うらうさう
うらう白ぢらうこのきあうはぢらん

詞とるふ仕立とらん句公專一かりと一際未
了押入つゝに俳言をくぬくひくひんくくく
といふ心の趣いさうゆらんを

宗長法師乃難読し付句の只おるいふまゝに
あつしとる終ぬやうおちんくあつし蓮乃き
を引切てんくくくくくくくくくくくくくく
系絶ふ事なしく其くくくに打越のう終前ふれ
ゆゑ終るの蓮のくくく切くくくくくにね縁

語をいふ人終り合はれしはくくくくくくくく
くはうくくくと俳諧しれくくくくくくくく
事しれくく

いふくくくくくくくくくくくくくくくくく
茶句と書付く撰き人乃くくくくくくくく
内長点くけくくく句公小短冊くく書留をく
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
此句を入るくくくくくくくくくくくくく
又無しの俳諧くく一吸とぬくくくくくく
付句を二句けくくくく宗匠乃くくくくくく

詠草一に古竹ゆり今に付るも作者のふゆり
しつれはゆりはゆりしつれはゆりしつれは
書付くまゝしつれはゆりしつれはゆりしつれは
物これとてゆりしつれはゆりしつれはゆり

しつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆり
付るもゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
松江乃翁と梅花翁と烈虎の今にゆり

しつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは

腰しつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは

と付ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆり
しつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
先古翁とゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは
ゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれはゆりしつれは

ゆりしつれは

えより一帯の花乃盛をさ縁として

いさこころつらん道なきりゆく

しりふ吉舟のにすらうしくけりりまこく高唐の
作意ともくけりりと拵て答うれいりつじく
これい何よわふ舟り中て尋ねるまこく行
そしり万葉のま一本しく見るといひまは
やうく執筆に書をし終らういふたの師の
いふうすちむくゆりをもてめいあくも懐紙

車り今りさおろろりくう作ら其外俳諧を

只うりよ車りよおのいなうらうらおるた
いりりくかそ人あさひ急量のおゆりもゆん
元禄十七年の春まはしたのうへを或人の
ゆりりりりめ床り貫之乃像をうま
幾る雨望をし終り時おぬるるうた書きて
こころ路る中に籬り梅のまらうく
そころおらるるま終りつてくゆりるれい

雨さりの梅と早もて昼たりの終

ことゝ句ははるるすつりたりとてこれ案一
 ちりりりりの中に好く蟻通り諷をきひ
 出さずよした趣向とてつとてたあへと仕
 立てる句とて作り感説をも亦へとてうり
 句を得たれいかくあやまるもなる句をよはあ
 作りぬとてつとてつとてつとてつとてつ
 した趣向なりつとてつとてつとてつとてつ
 あつとてつとてつとてつとてつとてつとてつ
 人乃常りつとてつとてつとてつとてつとてつ

一少へ守武宗鑑連致し對して俳諧と魚一
 貞徳立圃主類まゝ中興してつとてつとてつ
 此道をしりてつとてつとてつとてつとてつ
 やふして初学乃人志道に入りつとてつとてつ
 せしめよつとてつとてつとてつとてつとてつ
 うとてつとてつとてつとてつとてつとてつ
 人皆せかく古風を好くつとてつとてつとてつ
 作りぬつとてつとてつとてつとてつとてつ

いづれの彼を凡とすしなむけりとも其老人
を志せり人の次第あり世にさうゆりて凡俗
乃ちけりかろりし事よりそまひ入るる作者の
いふくを志しうけりは外なる事をは外を
こもも志しに或いふ今新しとせしむ事仕
ゆる句も古来いひけくしる内なる事とて
古くもし事をも兼へるる事とていふこと
只句なりしこといふ中なるけりゆりゆりとも
古格をとりひきつるを乃ち意しる事とて作者の
そのけりは外なるけりいふ事とて事とて
いふ事

いづれよりハ歳より歳よりけりまけりる事句
とてさくより十三歳よりは松江維舟師乃
らなむけりしこといふの事乃ち古風をよむ
此道しををいひく不新雅吟の百韻とけ
つるのけりし事乃ち古老なりしこといふ送る
点ぬこのこといふ事とて其数をさす
かくて十六歳よりはより梅翁老人の風流也

ふみふりけりて又其高風をりしむし其
のりぬもあえけりそ又字わすり文字うしに
或ハ寓言或ハ異形とぬくつらき一ハ比
類句付るうしに人ふよりさしけ我公
うもむのりうも一やんかきうぬも綴新
しける是れちてあそ可しぬるうそやん
中しあしとらさし我やうしうんを記
しあえりうしをうしじらうちくさう
のりうしに綴るぬれぬしとらうしに
うしにせりうしにあて或ハ色ぬぬもさるなり
うしにぬしはうしにぬしをねし
詞し巧しなくぬし色ぬぬもかゆし次只
さぬしにうしにちうしてさうも其は深し
あしうしに綴る句をぬしに

青柳のしるもかく岩乃ぬしに哉
中ん丸うしにぬしとさうに春日ぬれ
うしにぬしにぬしにぬしにぬしにぬしに
うしにぬしにぬしにぬしにぬしにぬしに

まゝの法高風と聞えし句

摺小本も紅葉しけり唐くし

くわいのかの宗祇法師の法より非道教道
非正道連正道といつたきくみゆへにき
俳諧の在句作意のよりのこや得たりとる

一 際しりのこり人き道しりもわに於て
やわんと延寶九年の法より骨髄し
とて物ま心よりし事なくやみそ

修く貞享二年の法はこの外に俳諧の
けしりもきしよりこののこりより色品り
一句のきくもあしきくをてりけく
皆るるるちる

修く得る人乃物よりとるはして未熟乃
人しゆんて我志も教しつる法かた
いはそのこゝに信しあけふ達人なり
とわしをよる人ふ筆のこしま乃
あしゆり及るぬ道いしすし修りし
へそ他会をぬりあしす守方をし

よほして品口先とめてよほちりい人
すむり終んこふ此この今とあつらうそあさほし
う終

〔高〕何もそくやと俳諧の中に此句は閑人
と信るまゆらぬ前句は何とつよや中回人
の終い今何あつらをさる子終よの相もあつ
かへく終ら高風のあつらんとふうこの事
つよとつよ人ちもあつらけつらあつら
高

いあ一談林風伊丹風たもつして句
よはく異形をほくさ一何高の又一高
句終あつらまらなく或の文字終けつら
あつらつら句も終終と二句終ら授を
ほつらつらあつら
いよ一入一入百韻乃俳諧を句毎
覚て或の終つら人つら或の悉く書
留ちんとつらつら今高風あつらつら
高一終らつらあつらつら人あつらつら終

わさういあふ縁語をほらして付られた
一句く丹いおきはわらえたり〜今いあ
白く縁終多た〜証ちらとと抄かえて作
りま〜れ向うと作ま何と〜てわらい出
と程もあ〜い〜人〜帯白く〜はらさる処
た〜人〜

祝儀乃祭向いろのあ〜つさをのりたり〜さ
乃〜向の〜地〜も柄をこのひ〜と付
白〜い〜詞〜終〜と〜い〜

四季を分終い〜との〜を〜く〜人
正月乃白〜三月の物をほら四月の白
六月の物を〜付ら作者も付ら付ら
あ〜終を〜い〜時〜相遠ちら中〜人
さ〜事〜専〜か〜人〜

急の詞をさ〜急の向ちらとと抄〜い
本情多た白く抄〜聞えたり詞〜急い
と〜付ら〜心乃深〜ん〜こ〜こ〜あ〜い
付ら〜はあ〜と俳諧乃終終り〜

八もなきくはりて此所仕侍りの人
こそはらうとんと成侍らん

「鶯のまぐ」郭公のまら侍るこそ侍る人なれ
うのふら四季折くろ草一本生敷くは
まぐらうくろの物くをさうまぐら
く所詮を糸へまぐらうまぐら
くまぐらうまぐらうまぐらうまぐら
郭公うまぐらうまぐらうまぐら

ついでにまぐらうまぐらうまぐらうまぐら

まぐらうまぐらうまぐらうまぐら

「春の月」くれうしろより朧くらして物を
ぬまうまぐら

「夏の月」灯をまぐらうまぐらうまぐら

「秋の月」窓くまぐらうまぐらうまぐら

「冬」まぐらうまぐらうまぐらうまぐら
照してまぐらうまぐら

まぐらうまぐらうまぐらうまぐら

まぐらうまぐらうまぐらうまぐら

五月雨の鬱しくとさびし

好らぬの屋より淋し

冬の雨のとらふさびし

未練のうらまは俳諧のまきぬのこま久字と言ひて

一対のまきぬのこま久字と言ひて

替作のこま久字と言ひて

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

Faint handwritten notes or a signature at the bottom left of the page.

